

## いのちを見つめて～宇宙意識に目覚めよう～

臨済宗妙心寺派仁照寺 江角弘道

### 1、はじめに～青春の狭い門～

いのちを見つめると、私たちの命の根源である宇宙にたどりつきます。ここでは、私が宇宙へと目覚めていった話をします。

昭和 20 年に、島根県出雲市の臨済宗妙心寺派仁照寺の長男として生まれたことが、その最初です。将来は、仁照寺の跡を継ぐであろうことが運命づけられていました。

しかし、文系の科目よりも理系の科目が好きでしたので、宗門の花園大学へは行かず、広島大学理学部物理学科に入学しました。大学 3 年の秋（昭和 40 年）に、朝永振一郎博士が素粒子物理学の「くりこみ理論」でノーベル物理学賞を受賞されました。それに感激して素粒子物理学を研究する研究者になろうと決心しました。素粒子物理学は、素粒子という「物」を研究対象として取り組んでいますが、初めは興味を持って研究していましたが、とてもこの研究が世のため人のためになるとは思えないと感ずるとだんだんと虚しくなってきました。研究すること自体が、息苦しく感じられる日々を過ごしていました。悩んだ末に、その頃エネルギー問題を解決されるであろう核融合発電というものが、世の脚光をあびて研究が進められていました。そこで、「核融合発電の研究をして、少しでも世の為になろう。」と思い始めました。一大決心で、指導教授に私の意志を話しましたが、なかなか賛成して頂けませんでした。何度か話している中で、「私は、素粒子物理学で玉砕したくありません。」と口走りました。すると指導教授は、「それならば良いでしょう。」と、やっと研究分野を変えることの許可を頂き、核融合発電の基礎となるプラズマの実験物理に研究の方向を変えました。

ところが、一大決心して研究分野を変えたわけですが、すぐにその分野の研究ができるわけでもなく、「人間、何のために生きているだろう」という大きな疑問に正面から対処しなければならなくなり、研究は全く手に付かなくなりました。こうなると今まで学んできた物理学の膨大な知識が心の中で音を発して崩れて行くような錯覚を覚えました。今まで自由に扱っていた物理学の数式に違和感を感じ、数式が取り扱えなくなりました。「物理がわからなくなった。」「この一大決心の転向は、間違いではなかったのか。」と思い始め、挫折感を深くして行きました。この時、25 歳、人生で初めて出会う「青春の狭い門」です。

### 2、禅への目覚め

この研究も何も手に付かない状態が半年ばかり続きました。その頃は、友人と遊んだり、話したりが苦痛になり、生きて行くこと自体が息苦しくなってきました。

ついに、自殺することを考えたりし、精神はボロボロの状態でした。今思えば、「人間なんの為に生きているのだろう。なぜ生きなければならないのか」という「大疑団」のただ中に居たのでした。そのような人生の時期に、誰に出会うのかということは、非常に重要なことだと思います。私の様子に心配した母が、「今、一畑寺で『安居会』という坐禅会をやっているから、ぜひ参加しなさい。」というので、参加しました。そこへ指導者として来ておられた方が、南禅寺派管長の勝平宗徹老師でした。その方が禅の書物である「碧巖録」を提唱（師家が宗旨の要綱を大衆に提示して説法すること）なさっていたのですが、私には何のことか分かりませんでした。しかし、その中で「鏡清雨滴聲」（碧巖録第46則）という公案（禅宗で修行僧が参究する課題）について、安居会の後に、何度も繰り返し、暗誦していると、心が少しずつ開けてきて、うつ状態を脱することができました。この公案は、次のようなものです。

「挙す、鏡清僧に問う、門外是れ什麼の声ぞ、僧云く雨滴声。清云く、衆生顛倒して己に迷うて物を逐う。」

この公案のより深い意図はさておき、「衆生顛倒して己に迷うて物を逐う」の部分を繰り返し暗誦していると、自分の状態に気が付きはじめました。それは、「やはり私も自分の外部ばかりに目が行き、外のものだけを追い求めて、迷っていたのだな」ということが薄っすらとわかってきました。これからは、「内だ、自己を究明していくんだ」ということ、それがわかったときは、身も心も軽くなりはじめました。これで自分の人生の方向が決定しました。このように心が決まってくると、不思議に研究も順調に進み始めました。

若き日に大きな夢を持ち、そしてつまずきや挫折を体験したことに感謝せずにはられません。

その後、縁あって、広島県三原市にある臨済宗仏通寺派管長の藤井虎山老師のもとで、参禅し、公案をいくつか数えました。しかしながら、この当時は、広島電機大学での物理学の研究にのめり込んでいましたので、参禅がだんだんと疎かになっていました。そして、平成4年に住職の父が亡くなり、その後を継いで住職となりました。運よく、平成7年、故郷の出雲市に島根県立看護短期大学が設立されたので、広島電機大学を退職し、島根県立看護短期大学に転職しました。これで、教職と住職が両立できる環境になり、とても喜びました。

### 3、理不尽な娘（20歳）の死

故郷に帰って4年経った平成11年の12月26日に、二女の真理子（20歳大学3年生）が飲酒運転の車の衝突事故で、即死するという家族にとっての大事件が突発しました。

私は、娘の死によって、本格的に仏教と真正面から向き合っ取り組まざるをえませんでした。それは、「娘の真理子は死んでどこに行ったのか」、「いのちとは何

か」、「いのちは誰のものか」などです。これは、まさに亡き娘から与えられた“公案”でした。「先立つ子は善智識」という和泉式部の言葉がありますが、亡き娘は、私を仏教について目覚めさせてくれましたお師匠さまであると、今、思っています。

娘を失って以来、「いのち」とは何だろうか。私達のいのちは、どこからきたのだろうか。そして失われたいのちはどこへいったのだろうか。いのちは誰のものだろうか。」等々、いのちと向かい合う日が続いています。そうした中で、仏教は「いのちの教えである」ことに気付きました。

「娘真理子はどこに逝ったのだろうか。」と悶々と娘のことを思っていると、次のような事実に行き当たりました。それは、私が結婚する前には、娘は世の中のどこにもいなかった。そして、昭和54年に二女として生まれてきて、私たちと20年間一緒に暮し、死んでいった。だから、今はこの世の中のどこにもいないということです。つまり、いのちが無（空とも言える）から出てきて実在（色とも言える）となり、実在（色）から無（空）へと帰っていったこととなります。般若心経には、有名な語句「色即是空 空即是色」があります。並べかえて空即是色 色即是空とすれば、空——>色——>空と展開しているようです。

私たちは、「空」から来て「色（形のあるもの）」となり、「色」から「空」に帰る存在であるわけです。空に帰る、つまりその帰るところは「いのちの根源」、「生まれ故郷」、「浄土」であるわけです。

#### 4、「見えるいのち」と「見えないいのち」

広辞苑によると、いのち【命】の意味は4つあると示されています。①生物の生きてゆく原動力。生命力。②寿命。③一生。生涯。④もっとも大切なもの。命ほどに大切に思うもの。これから、①はいわば、“見えないいのち”であり、②、③、④はいわば、“見えるいのち”といえます。

これから “いのち” には主として2つの意味があります。第1には、「生物が生きていくためのもとの力となるもの」（見えないいのち）です。第2には、「生きている間、生涯、一生」（見えるいのち）です。

解剖学者の三木成夫は、“見えないいのち” について、「生物には親子代々の連続がある。およそ現代まで40億年の連続で、親から子へ、子から孫へ、孫から曾孫へと波状に伝わってゆくものである。そのような波をもたらず源としてのいのち（生物を連続させていくもとなる力）である。」と述べています。

#### 5、現代科学と仏教の接点～宇宙意識について～

現代宇宙物理学によりますと、私たちの住む宇宙は、今から138億年前に、「無のゆらぎ」から直径1ミリメートルの千兆かける千兆分の1以下の1点（超マイクロ宇宙）として突然に生まれました。そのゆらぎが、臨界値を超えて、急膨張し、ビッグバン（大爆発）が起こり、強烈な光が生じました。その後、光から、粒子が生成

され、その粒子同士が結合して、多くの銀河系ができ、天の川銀河の中に太陽系ができ、太陽の惑星として地球ができました。地球誕生から六億年ほど経った頃（40億年前）、海で生命が誕生しました。そして、600 万年前に人類が誕生しました。この壮大な宇宙史は、すべて1点から生じた「ひかり」から始まり、宇宙の大法が働き続けています。だから、人類の根源にさかのぼって見ると、私たちは、光から生まれてきたことになり、みんなが「ひかりの子」です。

それにしても、だれがこの「無のゆらぎ」から、ビッグバンが生ずるようになる引き金を引いたのでしょうか。科学者たちは、そこに宇宙を誕生させた「創造主」のような存在を認めることをしません。物理学に「神」とか「創造主」という言葉を持ち込むのは、きわめて危険なことなのです。

しかしながら、宇宙物理学の世界的権威・桜井邦明博士（1933～）は、『宇宙には意志がある』（クレスト社、1995）の中で、その引き金の引き手は、『宇宙意志』であると、次のように語られています。

「宇宙のことを知れば知るほど考えさせられるのは、やはり人類が地球上に誕生するというのは、そうたやすいことではない、という事実である。もし、『宇宙意志』という言葉を使うことが許されるのであれば、よほど強靱な意志が宇宙になれば、人類という種は存在しなかったと思えるほどである。しかも、そうした「意志」は、宇宙誕生のときから、すでにあったものと思えない。宇宙はその形が出来上がった後に、人間を生み出そうと決心したのではなく、ビッグバンの時点から、すでにそうなるように準備していたのではないだろうか。」

私たちのいのちのなかには、宇宙の138億年の営みが込められていて、それは留まることなく展開し続けています。全宇宙はつながって一つであり、絶えずダイナミックに変化しています。そして、人間を生み出すような設計がしてありました。それは、『宇宙意志』が設計したものだと考えられます。

## 6、宗教意識～靈性（spirituality）について

鈴木大拙師の著書「日本的靈性」の中には、「靈性を宗教意識と言ってよい。宗教についてはどうしても靈性というべき働きがでてこないといけない。即ち靈性に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」「宗教意識は、靈性の経験である。精神が物質と対立して、却ってその桎梏（<sup>しこく</sup>厳しく自由を束縛するもの）に悩む時、自らの靈性にふれる時節があると、対立相克の悶は自然に融消し去るのである。これを本当の意味での宗教という。日本的靈性は鎌倉時代に始めて目覚めた。」とあります。

しかし、日本的靈性は、1万6千年前の日本人のルーツである縄文人の時代に目覚めていたとも考えられます。縄文人は、靈性という言葉こそ知らないが、それを縄文人は、朝日や夕日また星や雲などの自然のものから感じ取っていたのではないのでしょうか。さらに思考を進めると、「靈性は、ビッグバンの時代から滔々と流れて

きている」と考えられます。人類だけが靈性に目覚めることができたのではないかと考えています。

人類で、初めてはっきりと靈性に目覚められた人こそ釈尊であったと考えられます。釈尊は、宇宙はもともと一つで、それが繋がり合いながら、それぞれの姿をもって存在しているという事実にはっきりと目覚め、それを「縁起」という言葉ではじめて表された人であると考えられます。換言すれば、宇宙は、138億年かけて靈性に目覚めた人・釈尊を生み出したといえます。

この靈性は、「仏性」と言うこともあります。また、「阿弥陀（アミダ amita）」とも言います。阿弥陀（a mita）は、サンスクリット語で、aが「無」で、mitaが「計量した」、「計算された」の意味で、amitaで「無量」、「はかりしれないもの」と訳します。生命科学者の村上和雄氏（1997）は、それを「サムシング・グレート（偉大なる何者か）」と名付けています。それが「見えないいのち」です。この村上氏は、科学者として、遺伝子を研究する中で、「見えないいのち」を感得されています。サムシング・グレートは、人間の親の親、そのまた親の親とさかのぼって、生命のもとのもともとから創った「生命の親」であり、「生命の設計図」を書いてくれた大自然の偉大な力であると説明しています。

桜井邦朋博士は、著書「なぜ宇宙は人類を作ったか」において、「宇宙の意志」によって人類は作られたと述べておられます。さらに、「人間は、大宇宙に抱かれている存在であり、知的生命を可能にするように宇宙は進化してきた」と述べておられます。

## 7、靈性への目覚め

この「靈性」即ち「見えないいのち」を空気によって直接的に感得された人が、山田無文老師（1900～1988）です。老師は、修行時代に結核に侵され、自宅に帰られて療養を余儀なくされていた頃に、ある朝、ふと障子を開けて、濡れ縁に出られた時に、一陣の風を感じられた瞬間に抱かれた想いを次の詩に託されました。

**「大いなるものに抱かれあることを、今朝吹く風の涼しさに知る。」**

この時、無文老師は、「人は決して自分一人で生きているのではない。大きな力に生かされておるのである。」ことを実感され、「もったいないことであつた。」と、とめどもなく歡喜の涙を流されたとのことです。この「大いなるもの」は、実は「見えないいのち」であるわけです。この詩が出来る直前に無文老師は、『「いったい風とは何だろう』、その時ふとそんな考えがわたくしの心にうかんだのです。『空気がうごいているんだ』、わたくしは自分にそう答えました、『空気！ そうだ！ 空気と言うものがあつたんだなあ』と気がつくと同時に、とめどもなく涙がにじんでくるのをどうすることもできませんでした。」と永久に忘れられない感激をされています。さらに、「そんな大切な空気に、生まれおちてから今日まで、夜となく昼となく、やすみなく抱かれておつたのです。働いているときも遊んでいるときも、寝て

いるときも、こちらは空気などと思ったこともないのに、空気のほうはわたくしをわすれずに、しっかりと抱きしめていてくれたのです。」(『むもん法話集』春秋社、1963)と述べられています。

無文老師は、空気に靈性つまり「見えないいのち」・如来様を感じられていたのです。その後、無文老師の結核は治り、そして、妙心寺派管長、花園大学学長などを歴任されました。

## 8、おわりに

私が今ここに存在しているという事実を思うと、つまり、私のいのちを見つめると、突然この世に生まれてきてはいません。私に両親があり、両親の出会いが私の存在する直接の縁ということになりますが、両親の縁をさかのぼってみると、遠い先祖まで、何万年、何十万年と途切れることなく脈々と続いてきた、無数の生命があることに気づかされます。そして、その生命のもとには物質であったのです。その物質は、138億年前のひとつの光から生まれて来たものでした。

また私が生きているということは、家族だけでなく、社会の人たちや食べもの、着るもの、水、空気、地球、太陽など自分以外のすべてのものの支えを受けています。つまり私は、自分一人で生きているのではなく、生かされているのです。

いのちを見つめると、私たちは、「大宇宙(ひかり)から生まれて来て、大宇宙(ひかり)に生かされている存在」です。だから、「宇宙の始まりは私という存在の始まりでもある」ということになり、「宇宙は、さまざまな物や命を生み出してきたが、元々はひとつの光が姿を変えたもので、始まってから今までずっとひとつのままだ」と見ることができます。つまり、「ばらばらに物や生命が存在するという見方」から「本来ひとつのものが、相互に依存し合って存在するという見方」(諸法無我、無自性、空間的縁起)に目覚めることになります。「私は、私以外のすべてのものによって生かされている」即ち「わたしは大宇宙に生かされている」ことに目覚めることになります。そのことに気づいた時に出てくる感謝の言葉が「おかげさま」なのです。

鈴木大拙師は、「靈性を宗教意識と言ってよい。靈性に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」と述べられました。科学時代の現代は、「靈性を宇宙意識と言ってよい。宇宙意識に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」と思います。

## 参考文献

- 1) 山田無文『むもん法話集』(春秋社・1963年)
- 2) 鈴木大拙『鈴木大拙全集第八巻』(岩波書店・1968年)
- 3) 三木成夫『海・呼吸・古代形象』(うぶすな書院・1992年)
- 4) 村上和雄著『生命の暗号』(サンマーク出版・1997年)
- 5) 桜井邦朋著『命は宇宙の意志から生まれた』(致知出版社・2010年)